

令和 6 年 6 月 17 日現在

機関番号：23601

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2018～2023

課題番号：18K10198

研究課題名（和文）「看護する身体」を育成する教育プログラムの開発～現状調査と学生の学びの質的研究～

研究課題名（英文）Development of an Educational Program for "Embodied Knowledge of Nursing" ~ Understanding the Current Situation and Qualitative Research for Students ~

研究代表者

伊藤 祐紀子 (Ito, Yukiko)

長野県看護大学・看護学部・教授

研究者番号：50295911

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 3,300,000円

研究成果の概要（和文）：第1研究では、「看護する身体」に関する看護基礎教育の現状として、国内外の研究の動向を捉えて、日本看護学教育学会第31回学術集会にて発表した。
第2研究として、初めて受け持ち患者と関わる看護学生が臨地実習を通じて「看護する身体」をどのように生成していくのか、そのプロセスを明かにする研究は、研究計画書の研究倫理の承認を受け、学生15名の半構造化インタビューより逐語録を作成した。しかし、研究期間内に分析し成果を提示するには至っていない。この貴重な逐語録をもとに、今後研究を継続する。

研究成果の学術的意義や社会的意義

看護師の身体は、病いをもち療養生活をする身体的最も身近にあって、その身体を知るからこそ、「今ここで」の看護を生み出す存在である。AIにはできない、AIに譲ることのできない「看護する身体」の育成が喫緊の課題であり、基礎看護学教育のあり方を問い直すことが必要である。患者の身体をまなざし、看護する身体をどのように育成していくのか、新たな教育を検討するための基盤としての意義のある研究である。

研究成果の概要（英文）：First, as the current state of basic nursing education related to "physical knowledge through nursing," trends in domestic and international research were clarified. We presented our findings at the 31st Annual Meeting of Japan Academy of Nursing Education. Second, we conducted research on the process by which students develop "nursing body knowledge" for the first time through clinical training. The research protocol was approved by the Research Ethics Standard. We conducted semi-structured interviews with 15 students. From these, we have created a verbatim transcript. However, the results of the research have not been reached. Based on this valuable verbatim transcript, we will continue our research in the future.

研究分野：基礎看護学

キーワード：看護 看護教育 身体 身体性 相互身体 身体知

様式 C - 19、F - 19 - 1 (共通)

1. 研究開始当初の背景

看護は、患者一人一人何一つとして同じではない状況と変化を捉え、その人の潜在する可能性や秘められた力を探り、引き出しながら行なうものである。看護師が寄り添い、関心を向け関わるからこそ、生起する。ところが、昨今、生体反応監視装置、電子情報システムが導入されモニター越しに患者の異常を察知できるようになった。安全で効率的な看護を牽引する一方で、これらに囚われ、依存する危うさが生じている。システムは小型化され、ベッドサイドにも持ち込まれるようになった。患者と看護師が直接やり取りする場面に介在し、看護師はシステムのモニター越しに患者に質問し、その返答を入力するという光景が日常となった。看護師の視線は、患者ではなく、モニターに注がれ、その手はキーボードに置かれ、電子情報の確認、管理に追われている。患者の生活環境は、様々な機器のアラーム音、呼び出し音に溢れ、看護師はその対応に右往左往している。本来、看護師の身体は、病いをもち療養生活をする身体の最も身近にあって、その身体を知るからこそ、「今ここで」の看護を生み出す存在である。しかし、臨床の看護場面でこの看護の根幹、本質が揺らいでいる。

AIを含む看護支援システム導入が進み、臨床看護のあり様が激変するなかで、「対象者と相互作用しながら看護する身体」に関して、どのような基礎看護教育の現状にあるのか、動向を捉えるような検討はなされていない。本研究の学術的「問い」は、どれだけ看護支援システムやAIが臨床看護に導入されようとも看護の本質は揺ぎなく「患者をまなざし、看護する身体を育成する」ことにある。改めて基礎看護学教育はどうあるべきか、問われている。

2. 研究の目的

研究1: 「対象者と相互作用しながら看護する身体」に関する基礎看護学教育の現状について、国内外の教育現場の現地調査および文献検討からその動向を捉える。

研究2: 看護学生が基礎看護教育を受け、臨地実習の体験を通じて、どのように「看護する身体」を生成していくのか、そのプロセスを明らかにする。

研究3: 研究2の結果を伊藤(2011a, 2011b)の臨床看護師を対象とした先行研究を比較検討し、基礎看護学教育として重要な要素を検討する。

研究3の削除

研究2の成果は、看護学生の主観的事実に基づく、学修者を中心とした学びとそのプロセスを捉えた説明理論の生成とした。この説明理論は、看護学生がより深く看護の対象を理解し、より良き看護実践を導くために応用することができ、「看護する身体」を育成する教育プログラムの開発の基盤にも活用できると考えた。そのため、研究3の内容は、研究2の考察で行うことに変更し、研究3の目的を削除した。

3. 研究の方法

【研究1の方法】

Covid19の影響により、国外の教育現場にて調整していた視察やインタビュー調査は、すべて中止せざる負えなかった。そのため方法を文献研究に変更した。

医学中央雑誌 WebVer5、Google scholar、CINAHL、MEDLINE を用いて身体性、相互身体、身体知、看護教育、看護実践、看護学生、embodiment、embodied、embody、nursing、learning をキ

ワードに検索し 29 件(国内 19 件、海外 10 件)を分析対象とした。各文献の研究目的、方法、結果の類似性を検討し、「対象理解」「看護実践」「看護教育」の 3 つに分類した。倫理的配慮として著作権を侵害しないよう十分配慮して取り扱った。

【研究 2 の方法】

研究デザイン：修正版グラウンデッド・アプローチ（以下 M-GTA）

研究参加者：A 大学看護学部 2 年生 基礎看護実習 が終了した学生 15 名とした。

A 大学 1 大学としたのは各大学独自のカリキュラムを有していることから、同一カリキュラムのもと学修している看護学生を対象とするためである。初めての受け持ち患者と関わる看護学生としたのは、様々な患者との関わりを経験した上級学生より、一患者との関わり場面を想起しやすいと考えたためである。

データ収集方法：初めて受け持ち患者と関わり、看護した経験に焦点をあてた半構造化面接を実施した。

分析方法：看護学生 15 名のインタビューデータより、逐語録を作成した。

今後の分析は、次のように進める予定である。M-GTA に基づく分析焦点者は「看護基礎教育を学び、臨地実習で受け持ち患者への看護を経験した看護大学生」とする。初期データの分析内容を踏まえて、分析テーマを設定し解釈を進め、概念を生成する。解釈に沿って他のデータの類似例、対極例を検討し、1 概念ごとに分析ワークシートを作成する。分析ワークシートには、概念名、概念の定義、対極例を含めたヴァリエーション、理論的メモを記入する。概念と他の概念との関係を検討し、複数の概念の関係からカテゴリーを生成する。また、カテゴリー間の関係が分析テーマに照らして全体の動きを説明する構成になっているのか、関連図を描きながら検討する。理論的飽和化にあたっては、分析結果が分析焦点者から解釈され、分析テーマに対応しているか、データの範囲と分析結果が最適なバランスにあるかを確認する。その上で概念相互の関係、カテゴリーの関係、全体としての統合性を判断する。

なお、各段階の分析にあたっては、M-GTA の研究者のスーパービジョンを受けながら進める。

4. 研究成果

【研究 1 の結果と考察】

対象理解に関する文献 3 編の内訳として、看護師の身体を通じての患者理解（国内）3 編、医療スタッフの経験理解に関するもの（海外）1 編だった。看護実践に関する文献は 15 編あり、内訳として、看護技術に内在する身体性（国内）7 編、統合失調症患者への身体ケア（国内）2 編、コミュニケーション技術として触れること（国内）1 編、オノマトペ（国内）1 編、共感（海外）1 編だった。排泄ケアにおける実践知（国内）1 編、糖尿病患者へのエンボディメントケア（国内）1 編、新人看護師の実践知の再構成（海外）1 編であった。看護教育に関する文献は、10 編であり、内訳として臨地実習における学習活動（海外）2 編、（国内）2 編、看護コミュニケーション教育支援システム（海外）1 編、（国内）1 編、緩和ケア提供のための実践開発プログラム（海外）1 編、ケアリングの教育方法（海外）1 編、シミュレーション教育におけるデブリーフィング方法の検討（海外）2 編であった。

看護する身体に関する看護基礎教育の現状として国内研究では、看護技術や患者理解、看護ケアに内包されている身体性、その意図や意義を捉えていた。一方、看護教育に関しては、実習体験の振り返り、コミュニケーション教育支援システムの開発にとどまり進展していないことが示唆された。海外研究は、国内とは対照的に教育支援システムの研究が進展している。身体性はケアリングの一部として教育プログラムに組み込まれていた。また、シミュレーション教育におけるデブリーフィングの方法として検討されていた。

今後の研究課題として、身体性に関わる看護技術や患者理解は、言語化やみえる化することが難しいため研究の蓄積が必要である。身体性がケアリングの一部として教育プログラムに組み込まれていることは分かったが、その詳細な内容について継続して探索する必要がある。先行研究より明らかになった内容は、いずれも「対象者と相互作用しながら看護する身体」の教育を考えるうえで重要な構成要素になる可能性があるかと捉える。

【研究2の今後の展望】

研究参加者である学生15名の逐語録の作成までは、研究期間内に実施できた。しかし、逐語録を分析して成果を導き出すには至っていない。

本研究は、予期していなかった新感染症covid-19の影響により、大幅に遅延した。看護学生という人を対象とする研究であり、なおかつ医療機関と密接に関係しながら学んでいくことから感染症対策を最優先せざる負えなかった。また、研究者および共同研究者は共に、感染症蔓延渦にあって、看護の実践教育をいかに滞らせないか、オンラインによる実践教育の限界をどのように工夫して軽減するかに奔走していた。令和5年度 covid-19が5分類に移行したことで通常通りの臨床実習が実施できるようになり、その後ようやくデータ収集に至ることができた。

これらの経験を通じて得た新たな知見は、感染対策として実施された隔離やソーシャルディスタンスの渦中にあっても看護する身体は、やはり病いをもち療養生活をする身体の最も身近にあって、その身体を直接知ることが重要であり、だからこそ「今ここで」の看護を生み出すことができる存在であるということである。人が人に対してケアをする原点に看護があり、この原点を見失わない看護教育が重要である。今後も本研究の分析を継続し、その成果を学会、投稿論文にて報告するだけでなく、「患者をまなざし、看護する身体を育成する」教育プログラムの開発に向けての継続的に探究することが必要である。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計0件

〔学会発表〕 計1件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 0件）

1. 発表者名 伊藤祐紀子
2. 発表標題 「看護する身体」に関する看護基礎教育の現状～国内外研究の動向を捉える～
3. 学会等名 日本看護学教育学会題31回学術集会
4. 発表年 2021年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	那須 淳子 (Nasu Junko) (10613151)	長野県看護大学・看護学部・講師 (23601)	
研究分担者	上條 こずえ (Kamijo Kozue) (40635695)	長野県看護大学・看護学部・講師 (23601)	追加：2022年6月16日
研究分担者	白川 あゆみ (Shirakawa Ayumi) (80535641)	長野県看護大学・看護学部・助手 (23601)	追加：2022年6月16日
研究分担者	阿部 正子 (Abe Masako) (10360017)	名城大学・健康科学部・教授 (28003)	削除：2022年6月16日

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8 . 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------